

スリランカ駐在記 ~できなくてもできる、 辛くても辛くない~



(暴動で放火されたバスを背景に)

村上 隆志 (むらかみ たかし)

前・在スリランカ日本国大使館一等書記官
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部札幌河川事務所計画課長

1996年北海道開発局入局。2021年3月から24年3月まで在スリランカ日本国大使館一等書記官として経済開発協力班に所属。2024年4月より現職。

桜が咲くにはまだ早い北海道の3月。

在スリランカ日本大使館での勤務を終え、筆者は日本に戻りました。

ちょうどTVでは、SnowManの目黒蓮くんが「紅茶鉄道」と呼ばれるレトロな列車に乗り、スリランカ屈指の茶葉産地ヌワラエリヤの美しい茶畑を「午後の紅茶」片手に車窓から眺める…というCMが放送されたばかりでした。



走行中もドアと窓は開け放しの列車

清潔感しかないイケメンの笑顔、ドアと窓が開け放たれ開放感ある列車のシルエットがオシャレです。タレントの顔面偏差値の高さと現代の映像加工技術は素晴らしいですね。

撮影だからドアや窓が開いているわけではなく、実際は経年劣化でサビでボロボロ、閉められないドアやカビ臭のする座席など、昭和感たっぷりの古い古い列車なのです。

「ガタン、ゴトン」という音がぴったりのこの列車は、中国やインド、ロシアなどで使われていたお下がり、人々の貴重な通勤手段として、国内最大の経済都市コロンボと地方を結んでいます。

この国は自国産業が乏しく、輸入品頼りのモノカルチャー経済の国です。車やバイクは日本の中古品が主流で、日本ではもう部品がないような古い車が現役で活躍しています。

また、三輪バイクのタクシー「トゥクトゥク」は1km50円ほどと安価で、いつでもどこでも気軽に利用できるのも、国民の生活に欠かせない存在です。

目が合えばすぐに「どこに行く？」と人懐っこいドライバーがしつこく声をかけてきます。ほったくられないように値段交渉力を磨いた筆者の、この国での体験を少し紹介させていただきます。

スリランカの歴史

かつて「セイロン」と呼ばれていたスリランカは、インドからわずか29km離れたインド洋に浮かぶ小さな島です。

国土面積は北海道の8割で、気温は一年中30℃を超える常夏の国です。

歴史は非常に古く、インドから仏教が伝来して以来、19世紀前半まで二千年にわたってシンハラ王朝が続き、同じ王朝がこれほど続くのは、日本の皇室と同様に非常に稀なことです。16世紀には、ポルトガル、オランダ、そしてイギリスによる植民地支配が始まりました。1815年にはイギリスにより王朝が滅ぼされ、その壮麗な王朝文化は失われました。現在、当時の栄華を物語るのには世界遺産に登録されたかつての遺跡群だけです。

1948年にイギリスから独立しましたが、1983年から2009年までの26年間、民族間や宗教間の対立から内戦

が続ききました。それが終結し、ようやく経済復興に力を注ぐ時代が訪れました。「シンガポールも超える」とも言われるほど、めざましい近代化を遂げると期待されていましたが、中国の「債務の罠」にまんまと陥り、2022年にはついに国が債務不履行となり、天晴れなほどの経済破綻を迎えることになりました。

筆者が駐在したのは、コロナ蔓延によるロックダウンが続いた2021年、そして経済破綻を迎えた2022年、物価高騰がえげつない2023年の3年間でした。

スリランカの国民性

筆者は、在スリランカ日本国大使館の経済開発協力班に所属し、ODA（政府開発援助）によるインフラ整備支援や、この国に進出する日本企業のサポート、大使が要人に面会する際の随行、記録作成や報告業務、日本からの要人対応などを担当しました。

しかし、コロナ禍による制約や経済破綻の影響で、インフラ整備の計画は進まず、日本企業の撤退が相次ぎました。このままでは、国交省アタッシュとして外交の最前線での責務を果たせないのでは、と不安に感じることもありましたが、次々と発生するこれらへの対応に追われ、日々の業務に忙殺される毎日でした。

スリランカ政府関係者をはじめ現地の方々とのやりとりは英語が主で、筆者の乏しい英語力も、そのおかげで少しずつ鍛えられていったように思います。

スリランカは、多民族国家であり多宗教の国でもあります。

先に触れた内戦が終結してから10年以上経っても、宗教や人種差別は根強く残り、筆者も日々の中でそれらの現実を目の当たりにしました。

それでも、筆者の目から見たこの国の人々は、非常にゆったりしていて、人懐っこく、誰とでも仲良くおしゃべりを楽しむことが大好きです。とはいえ、あらゆることにおいていい加減さが目立ち、その場で即座に返事をする文化が根付いているため、知らないことでも「知っている」といい、できないことも「できる」と無邪気に答えることがしばしばです。

計画的に物事を進めるよりも、その場しのぎで対応することを好み、他力本願で物事を進める傾向があります。そのため、国家間の外交交渉においても、ようやく合意に達したと思っても、いいかげんさ200%で

翌日には「やっぱり無理」と反故にされることも頻繁に起こりました。

一か月前から約束していた日時も、一週間前、二日前、前日と何度も確認しているのに、直前になって「別の予定があるから変えてくれ」と言われるのが当たり前でした。こうした状況で、日本から訪れる要人のスケジュールを調整する際は、予定が変更されることを前提にする必要があり、非常にスリリングな経験となりました。

日本人には当たり前の感覚が、スリランカでは通用せず、イライラすることも多かったですが、彼らから見れば、日本人がなぜこれほど時間に厳しく、細部まで決めたがるのか、不思議に思われていたことでしょう。

今振り返ってみると、むしろ日本人の性質が特殊であり、海外に住む者にとってこうした経験は一種の通過儀礼でもあるのだと感じます。筆者も、ザ・スリランカならではの「いい加減さ」に何度も洗礼を浴びましたが、彼らは南国らしく陽気で、シャイな一面を持ち、どこか憎めないところもありました。

スリランカと日本のかかわり

日本国大使館は、130年前に当時の最高裁判事宅として建築された美しい白塗りの洋館です。

重厚な門を通り、敷地に一歩足を踏み入れると、カラフルな花々が美しい前庭、大きな菊の紋章が飾られた柱廊式玄関、大きな赤い絨毯が伸びる中央階段が迎えます。

日本大使館の格式を感じさせる建物ですが、アメリカや中国、ロシアの大使館と比べると規模はとても慎ましくて、敷地の広さにも国の影響力があらさまに表れているようでした。ロシアに至っては、敷地内にコンサートホール、大使館員子弟のための学校などを備えています。

それでも、占有敷地の広さだけがすべてではなく、日本とスリランカの関係は非常に深いものがあります。



ルネサンス式建築の日本国大使館

そのきっかけは第二次世界大戦敗戦後^{さかのぼ}に遡り、戦勝国が日本を分割統治しようとする際、故ジャヤワルダナ元大統領（当時蔵相）がサンフランシスコ講和会議において「人は愛によってのみ救われる」と演説し、日本の分割を阻止したのです。この恩により、日本は国際社会へ復帰を果たし、それ以来日本はスリランカへの支援を続けています。

スリランカの人々も、日本人に対しては特別深い敬意を持っており、「日本から来た」と答えると、彼らは満面の笑みで「日本は素晴らしい」と称賛してくれます。そしてその舌の根も乾かぬうちに「今もスリランカは大変だから助けてくれないか」と、ニコニコと金の無心をしてくることも常でした。

それでも、先人達の誠実な支援のおかげで、現代の日本人達がこうして尊敬を受けていることに感謝し、筆者も背筋を伸ばして「外交官」としての役割を果たすことができたのは、非常に貴重な経験でした。

スリランカの魅力

スリランカはまた、サファイアの産地としても有名です。かのダイアナ妃に贈られたブルーサファイアもスリランカ産であり、特にピンクとオレンジが混ざり合った「パパラチャ」サファイアはたいへん希少価値が高く、世界市場でも高額で取引されています。

「ミスター、宝石との出会いは一期一会デスよ」と、うさんくさい日本語で話しかけてくる宝石商達は、偽物かも、とあやしむほどの大きな天然石を目の前に並べてくれます。

わざわざ手間とコストをかけて偽物を作るよりも、天然石が豊富なため、この国の市場に偽物はあまり出回りません。どこのお店でも比較的安心して天然石が購入できるのも魅力の一つです。しかも、日本で購入するよりもはるかにリーズナブルな価格で手に入ります。

もう一つの魅力は、世界屈指の紅茶の産地であることです。日本に輸入される紅茶の大部分はスリランカ産であり、特に「午後の紅茶」に使われるほとんどがスリランカ産です。国内には数多くの紅茶メーカーの



色とりどりの宝石が並べられてゆく

加工場があり、紅茶はこの国を支える必要な輸出資源となっています。

この小さな島には、ビーチリゾート、世界遺産の王宮跡「シーギリヤ」、そして茶畑が広がる中央高地といった多彩な観光地があり、欧米やロシアからも非常に人気があります。

日常生活

とはいえ、いざ現地で生活をするとなると、日本の便利さや清潔さが何度も恋しくなりました。日本では当たり前なのが、当たり前ではない環境に慣れるまで、いろいろなことがありました。

特に、家族を帯同しての生活は苦勞が多く、妻には多くの面で負担をかけました。

海外を渡り歩いている大使館員やその配偶者達、子どもが通う学校の保護者達、日本人会のつきあいなど、一人でもなんとかなる日本とは違い、避けては通れない日本人コミュニティとの関わりは深く、現地の人々との英語でのやりとり、限られた日本食材の中で家族の食事を工夫して作ってくれたことには、大きく感謝しています。帰国後のわが家での筆者の扱いが、以前より雑になったのも当然のことかもしれません（笑）。

愛されるチリパウダー

スリランカの主食は、カレーです。

高温多湿の気候のため、防腐のためにスパイスと辛味をふんだんに使った料理が主流です。

KFCのレギュラーチキンにすらチリパウダーが使われており、日本の「スパイシー味」と同じレベルの辛さです。イタリア料理にもチリが使われていることが多く、注文時に「チリ抜きで」と伝えないと、クリームソースなのに辛い、という謎のクリームパスタがサーブされます。



素焼きの鍋で作る伝統的なカレー

「これは辛いの?」と質問すると、彼らは「辛いくないさ!子どもも大丈夫」とにっこりと微笑んでくれます。

でも、その笑顔は絶対信用してはいけません。いついかなるときも油断は禁物なのです。

沿道で売られている南国の果物にも、チリパウダーがふりかけられております。

わが家のドライバー曰く「チリパウダーをかけるとおいしくなる」そうです。

それだけ彼らはチリパウダーをこよなく愛しています。そのため、多くのレストランでチリ抜きを頼んでも「チリを使うと美味しい」からと、彼らのありがたい親切心で、10回のうち8回は辛い味となって出てくるのも、この国らしいところです。

わたしの知らない世界

日本大使館の近くには、日本政府の特命を全権委任された「大使」の住居を兼ねた「大使公邸」があり、政府関係者や各国の駐在大使との会談が行われる大広間（サロン）や、食事会が催されるダイニングルームにコックが常駐する厨房が完備されています。食事会では、小さなティースプーンに至るまで菊の紋が刻まれた食器が使われ、日本国の威厳を感じます。公邸にはドレスコードが厳格に決まっており、30℃を超える常夏でも素足にサンダルやノーネクタイは許されません。

また、サロンには現在の天皇皇后両陛下の御写真がピカピカの銀のフレームで飾られています。ここに入室する日本人たるもの、写真を撮ることはもちろん、両陛下に背を向けることさえまかりならん、という暗黙のルールがあるのを知ったのは、筆者が赴任してから1年もたった後でした。それまで、大使の目の前で何度お尻を向けたことかと、冷や汗が出ました。

ほかに「大使、大使夫人への赴任挨拶やお礼状は真白い封筒と便箋を使用すること」、大使夫人は「奥様」、館員の配偶者は「夫人」と呼ばなくてはならない、などなど。筆者にとってそれらはまさに「わたしの知らない世界」でした。



リゾートホテルからインド洋を眺める

デフォルト

筆者が滞在中に、スリランカは経済破綻しました。国の指導者達が返済の見通しも立てずに他国から借りたお金で私腹を肥やしまくって経済を傾けた結果と言えます。

スーパーの棚から生活必需品が消え、ガソリンも手に入らなくなり、あれだけ混雑していた道路から車やバイクが消えました。日常は一変し、国民は怒り、各地で大規模な反政府デモが発生しました。その勢いに恐れをなした時の大統領は、命からがら国外逃亡もしたほどです。筆者の妻も、デモの余波で危険な目に遭ったことがありますが、こうした混乱は日常茶飯事でした。

その後、新しい大統領が決まり、国の情勢が少し落ち着くと、逃亡していた元大統領は、何食わぬ顔で自身の大豪邸に戻りました。この元大統領がスリランカに入国した際、この国は落ち着きを取り戻しつつあったので、人々は関心を示しませんでした。また、この元大統領の兄で長きにわたり首相や大統領として権力の座に君臨し経済破綻時に首相を務めていた人物は、日本大使館主催の天皇誕生日レセプションに、その特徴的な赤いマフラーを首に提げて堂々と来賓として出席していました。こうした人物が国の政治に関与する国です。スリランカの人々を語る上で、これは象徴的なエピソードだと思います。

まだまだ語り尽くせないネタがたくさんあるのですが、筆者が過ごしたスリランカは良くも悪くも魅力あふれるネタの宝庫であったことは間違いありません。

筆者と懇意にしてくれたスリランカ人が「30年前も経済発展途中だったケド、今もまダまダ発展途中だヨ(笑)」と流暢な日本語で言っていたのが印象的です。

この国が今後どう発展していくのかわかりませんが、南国らしいゆるさとともに、温かい人々が迎えてくれることでしょう。ぜひ機会がございましたら、一度訪れてみてください。



トゥクトゥクが走る田舎道